

# 父親と自転車

小川未明

青空文庫



吉坊よしぼうは、父親ちちおやに、自転車じてんしゃを買かつてくれるようにと頼たのみま  
した。

「そんなものに、乗のらなくたって、いくらでも遊あそべるでないか、  
ほかの子供こどもをけがさしてみい、たいへんだぞ。もうすこし大きおおく  
なつてから、買かつてやる。」と、父親ちちおやは頭あたまを振りふりました。

「清きよちゃんも、徳とくちゃんも、みんな自転車じてんしゃを持もっているのに、  
僕ぼくだけ持もっていないのだもの、つまらないなあ。」と、吉坊よしぼうは、  
いくら頼たのんでもむだなことを悟さとると、歎たん息そくをしました。そのく  
せ、父親ちちおやは金かねがあれば、すぐさに酒さけを飲のんでしましまうことを知しつて  
いたのです。

吉坊は、外へ出ると、友だちが自転車で乗って、愉快そうに走っているのを、うらやましそうにながめていました。

「あんなに風を切つて、走つたら、どんなにかおもしろいだろうな。」と、清ちゃんが、頭の髪をなびかせて、走っているのを見て、思いました。

吉坊は、両手を頭の上ののせて、清ちゃんがあちらへゆけば、その方を見送り、こちらへくればまた目を放さずに、迎えていました。

清ちゃんは、吉坊の立つて、見ているのを知っていました。しかも、きょう学校の帰りに、豆腐屋の長二に、自分がいじめられているのを、吉坊が助けてくれたのを、けっして忘れま

せんでした。いま、吉坊よしぼうがぼんやり立たつてさも乗のりたそうに、  
 自分じぶんの走はしるのを見みているのに気きがつくと、車くるまをとめて、  
 「吉よっちゃん、僕ぼくのうしろにいつしよに、お乗のりよ。」といいまし  
 た。

吉坊よしぼうは、清きよちゃんが、そういつてくれたので、どんなにあり  
 がたかつたでしょう。

「いいの、清きよちゃん、僕ぼくをうしろに乗のせてくれる？」と、吉坊よしぼう  
 は、清きよちゃんのいったことを疑うたがいでもするようにな、念ねんをおして、  
 それから、そのうしろに乗のせてもらいました。吉坊よしぼうは、清きよちや  
 んの肩かたにつかまりました。清きよちゃんは、ハンドルを握にぎつていまし  
 た。二人ふたりは、いままでゆかなかつたような、遠えん方ぼうまで、一ひと息いき

に走<sup>はし</sup>つてゆくことができました。

「清<sup>きよ</sup>ちゃん、こんな遠<sup>とお</sup>いところまで、たびたびきたことがある？」

「きたことはない。きようは吉<sup>よし</sup>ちゃんが、いつしよだから、僕<sup>ぼく</sup>き

たんだよ。」と、清<sup>きよ</sup>ちゃんは、気強<sup>きづよ</sup>かったです。そして、めつ

たに通<sup>とお</sup>らない道<sup>みち</sup>をまわりまわつて、またなつかしい自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の家<sup>いえ</sup>の前<sup>まえ</sup>

まで帰<sup>かえ</sup>つてくると、なんだかたいへんに遠<sup>とお</sup>い旅<sup>り</sup>行<sup>こう</sup>でもしてきた

ように、愉<sup>ゆ</sup>快<sup>かい</sup>な気<sup>き</sup>がしたのです。

「ありがとう。」と、吉<sup>よし</sup>坊<sup>ぼう</sup>は、お礼<sup>れい</sup>をいいました。

「吉<sup>よし</sup>ちゃんも今<sup>こん</sup>度<sup>ど</sup>お父<sup>とう</sup>さんに、自<sup>じてん</sup>転<sup>しゃ</sup>車<sup>か</sup>を買<sup>か</sup>つておもらいよ。」

と、清<sup>きよ</sup>ちゃんがいきました。

吉<sup>よし</sup>坊<sup>ぼう</sup>は、ただ黙<sup>だま</sup>つて、悲<sup>かな</sup>しそうな顔<sup>かお</sup>つきをしていました。

「そうすれば、徳ちやんと三人で走りっこをしよう。」と、清ちやんは、吉坊の心なんかわからず、朗らかでありました。

吉坊は、学校で走りっこをすると、選手にもそんなに負けないので、走ることにかけては自信を持つていました。

「自転車さえなければ、いいんだがなあ。」と、吉坊は、考えていました。

けれど、家に帰ると、やはり、清ちやんや、徳ちやんたちが、自転車に乗つて、遊んでいました。

「清ちやん、自転車の走りっこをしようか。」と、徳ちやんがいました。二人は同じような型の、赤い自転車に乗つていました。

「ああ、往來おうらいの、あつちの曲まがり角かどまで、走はしりつこをしよう。」と、清きよちゃんが、答こたえました。

そばにいた吉坊よしぼうは、独ひとり取とり残のこされるのが悲かなしくなつて、「僕は、足あしが早はやいんだよ。だから、僕ぼくもいっしょに走はしりつこをしよう。」といいました。

そして、二人ふたりが、自じてん転しゃ車で走はしる後あとから、吉坊よしぼうは、真まつ赤かな顔かおをして、自じてん転しゃ車を追おつかけたのであります。

ちようど、この有あり様さまを、外そとからもどつてきた吉坊よしぼうの父ちち親おやが、見みたのでした。彼かれは、このいじらしいようすが、腹はら立たたくもありません。そして、にらみつけたのです。

しかし、夢むちゆう中ちゆうで走はしっている吉坊よしぼうにはわからないのでした。



「ああ、おれが悪<sup>わる</sup>かった。」と、父親<sup>ちちおや</sup>は、心<sup>こころ</sup>の中<sup>うち</sup>で泣<sup>な</sup>いたので  
す。

「ばかめ、自<sup>じてん</sup>転<sup>しゃ</sup>車<sup>あ</sup>の後<sup>あと</sup>をおっかけるなんて、二、三日<sup>にち</sup>したら自<sup>じ</sup>  
転<sup>てん</sup>車<sup>しゃ</sup>を買<sup>か</sup>つてやるぞ。」と、その夜<sup>よ</sup>、父<sup>ちち</sup>親<sup>おや</sup>は、吉<sup>よし</sup>坊<sup>ぼう</sup>の、頭<sup>あたま</sup>  
をなでながら、いいました。

しばらく酒<sup>さけ</sup>を断<sup>た</sup>った、父<sup>ちち</sup>親<sup>おや</sup>は、どこからか、子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>の乗<sup>の</sup>る、古<sup>ふる</sup>  
の自<sup>じてん</sup>転<sup>しゃ</sup>車<sup>あ</sup>を、さがしてきたのでありました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「教育・国語教育」

1935（昭和10）年8月

※表題は底本では、「父親《ちちおや》と自転車《じてんしゃ》」  
となっております。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 父親と自転車

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>